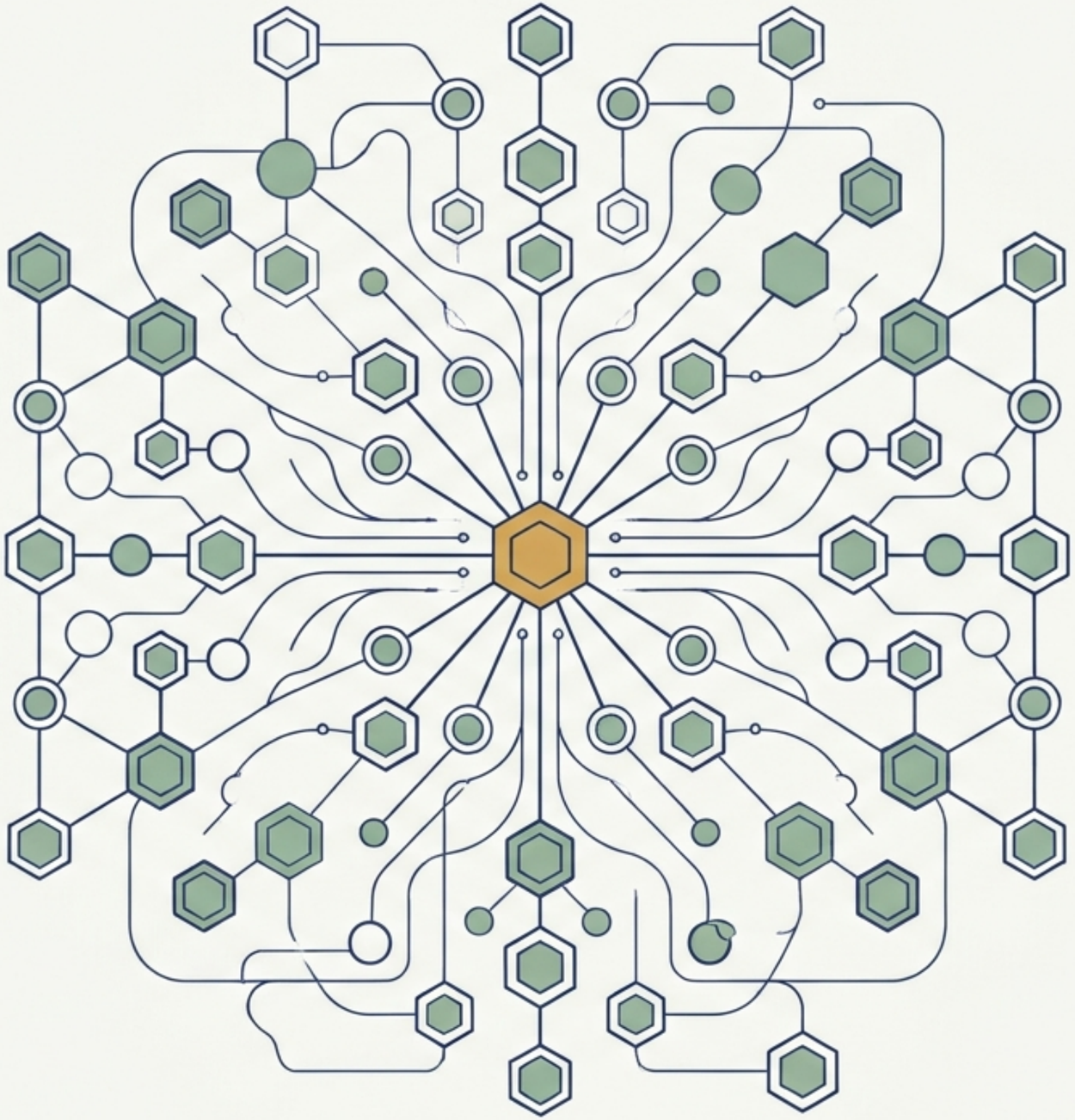
Perplexity Multiagent 知財実務調査報告

次世代AIを活用した知財業務のパラダイムシフトと実装に向けた戦略的プレイブック

2026年11月19日時点

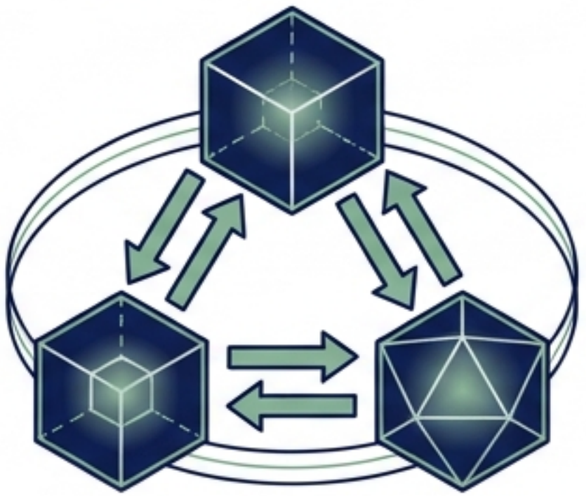


Gemini Notebook

Trigger（起点）
公報の変更検知



Engine（自律的連携）
Multiagentによる引継ぎ



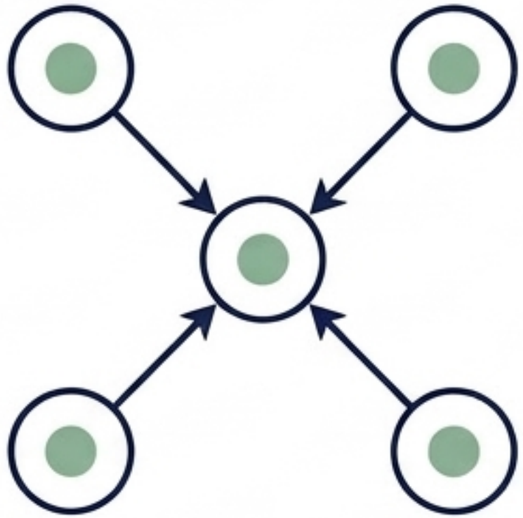
Outcome（最終価値）
対比表と確認事項の同時更新



Multiagentの真の価値は、単一のタスク処理ではなく、「発見」から「関連部門へのアクション生成」に至る知財実務のシームレスな連鎖（自律的な情報のバトンパス）を実現することにある。

Gemini Notebook

Ultra モード



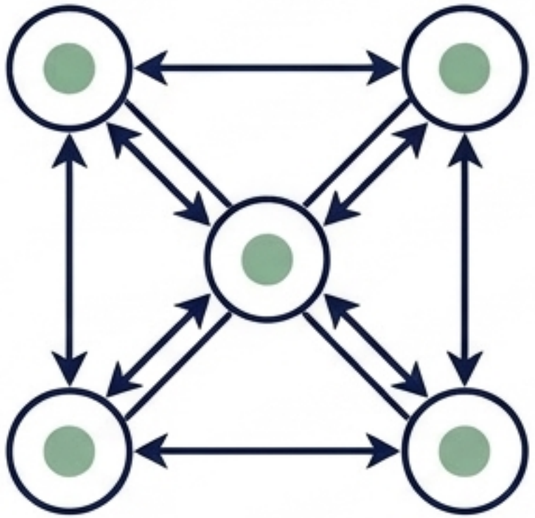
情報経路

各担当からリード役への
一方通行の報告

最適知財ユースケース

複数国の公報を定型項目で
一律に要約する作業

Multiagent モード



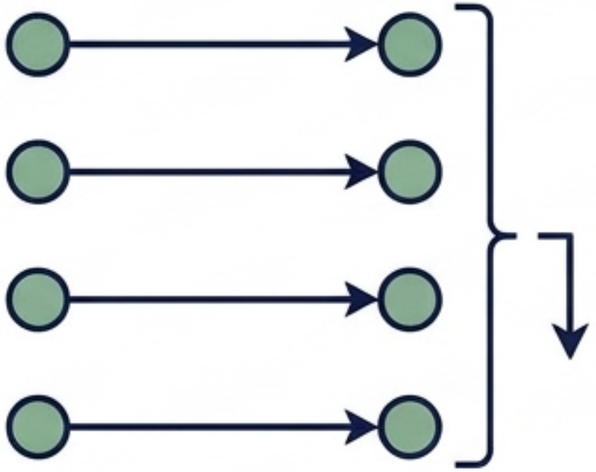
情報経路

担当同士が直接証拠を交換し、
リード役が最終統合

最適知財ユースケース

分割出願の発見を権利状態担当
へ伝達し、クレーム対比表を
動的に更新

Model Council モード



情報経路

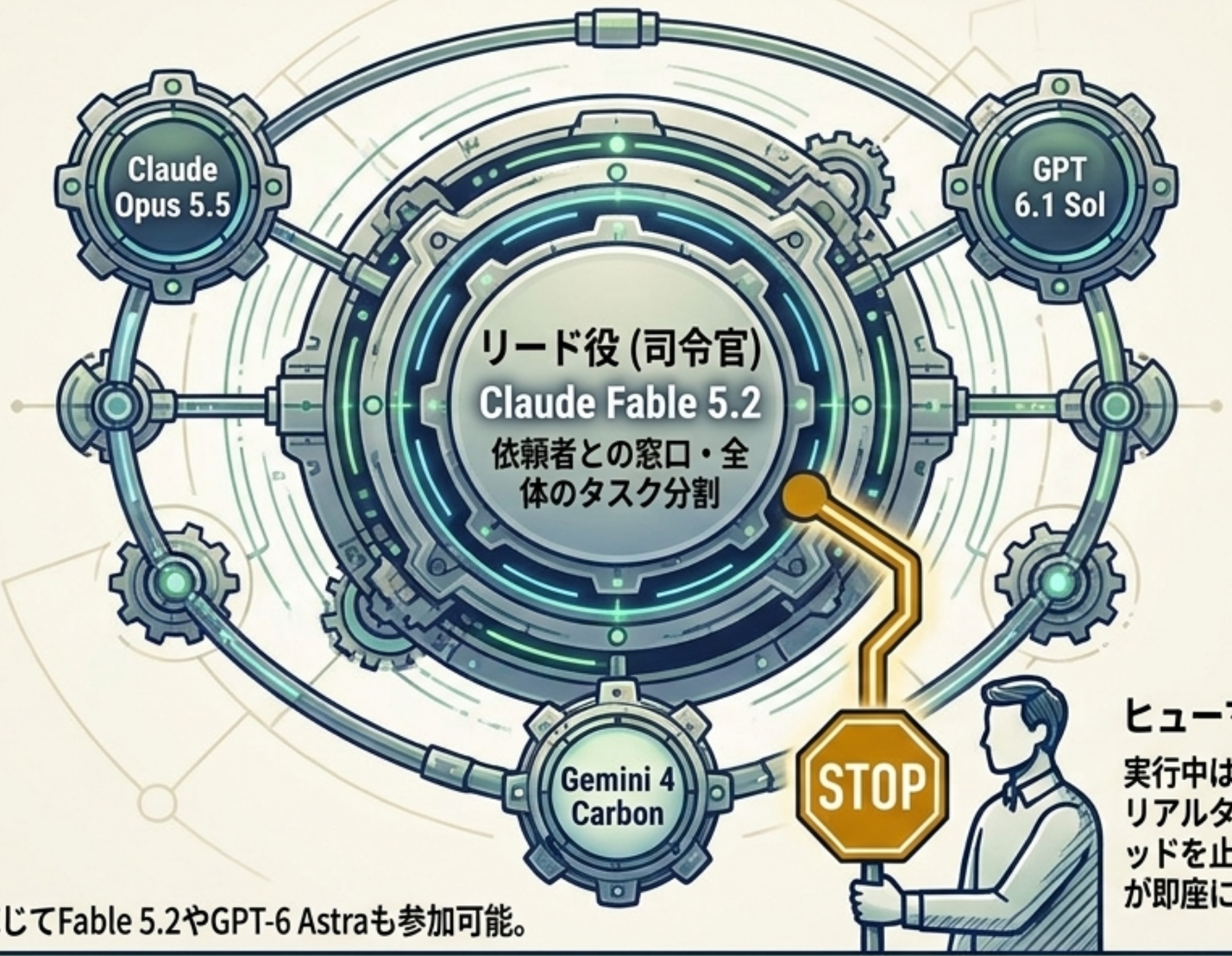
同じ問いを独立並行で検討し、
一致点・相違点を整理

最適知財ユースケース

同一の請求項用語に対する、
有力な解釈と対立する読みの
徹底的な洗い出し

Gemini Notebook

Multiagentのシステムアーキテクチャ



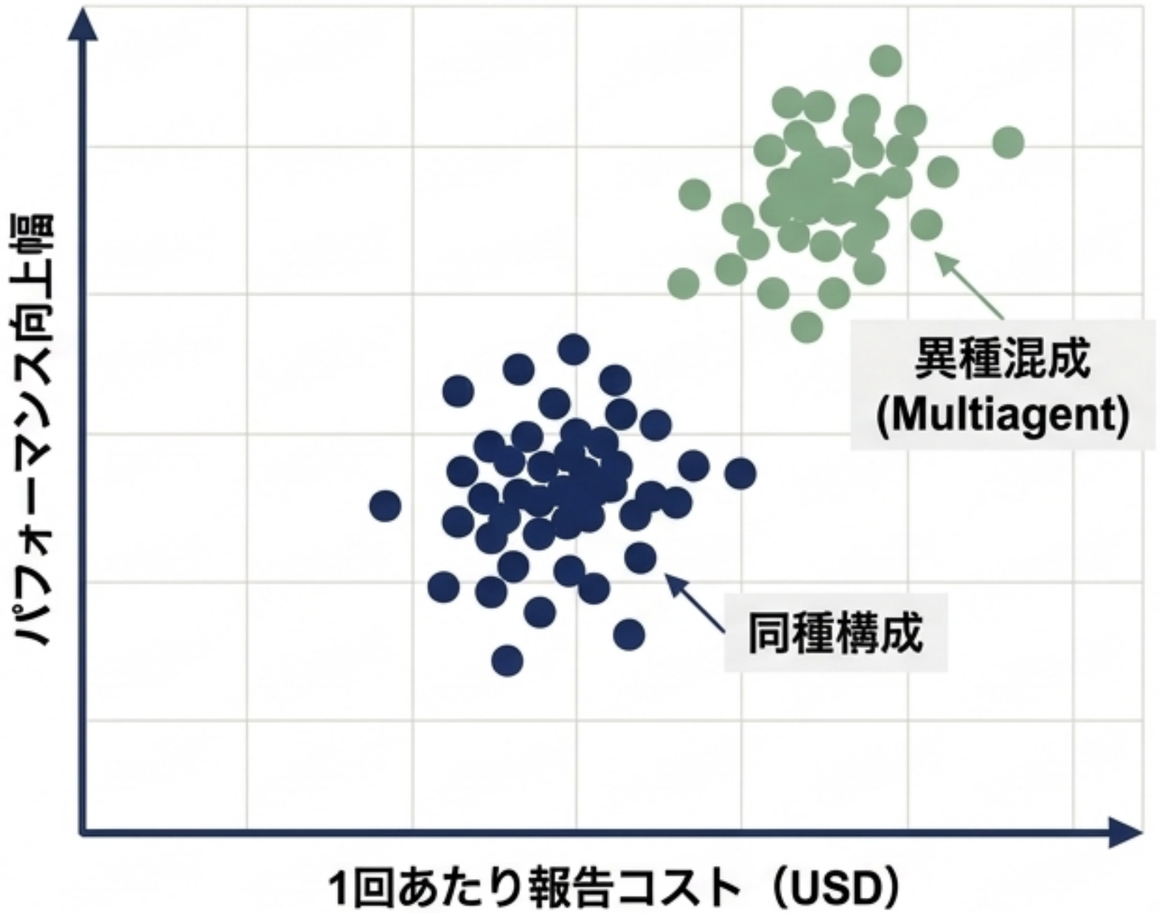
ヒューマン・イン・ザ・ループ

実行中は各担当とモデルのやり取りをリアルタイムで監視可能。人間がスレッドを止めると、全体の自律プロセスが即座に停止する安全設計。

※最大16の分担先。必要に応じてFable 5.2やGPT-6 Astraも参加可能。

Gemini Notebook

公表性能とコストの実態（ROI分析）



Terminal-Bench 4.1 (端末操作・調査データ処理)

性能改善: 異種4体構成がスコアを＋0.008〜+0.125改善

最高スコア: 0.727 (Gemini 4 Carbonリード)

同種単一最高: 0.652

1回あたりコスト: 異種混成 約10.31ドル / 同種4体 約13ドル

WANDR （多数根拠のウェブ調査・公報収集）

性能改善: 異種4体構成が＋0.015〜＋0.064

1回あたりコスト: 異種混成 54.50ドル / 同種4体 66.41ドル

戦略的示唆: Multiagentは消費クレジットが大きいため、高付加価値タスク（重要案件の深掘り）に限定して投入することが費用対効果の鍵。

Gemini Notebook

知財業務への適用パイプライン（全体像）



分類担当 -> ファミリー担当 -> 技術担当

引継ぎ: 変更限定事項



分類/同義語/引用担当の並列検索



権利状態担当 -> 対比担当

引継ぎ: 開発部門への質問状生成





拒絶理由/引用担当の連携

引継ぎ: 権利一覧とライセンス条項照合

SDI (新着監視)

先行技術調査

FTO (侵害予防調査)

IPランドスケープ

中間応答・知財DD

分類/同義語/引用担当の並列検索

引継ぎ: 発見用語のループバック

特許・技術担当＋市場・事業担当

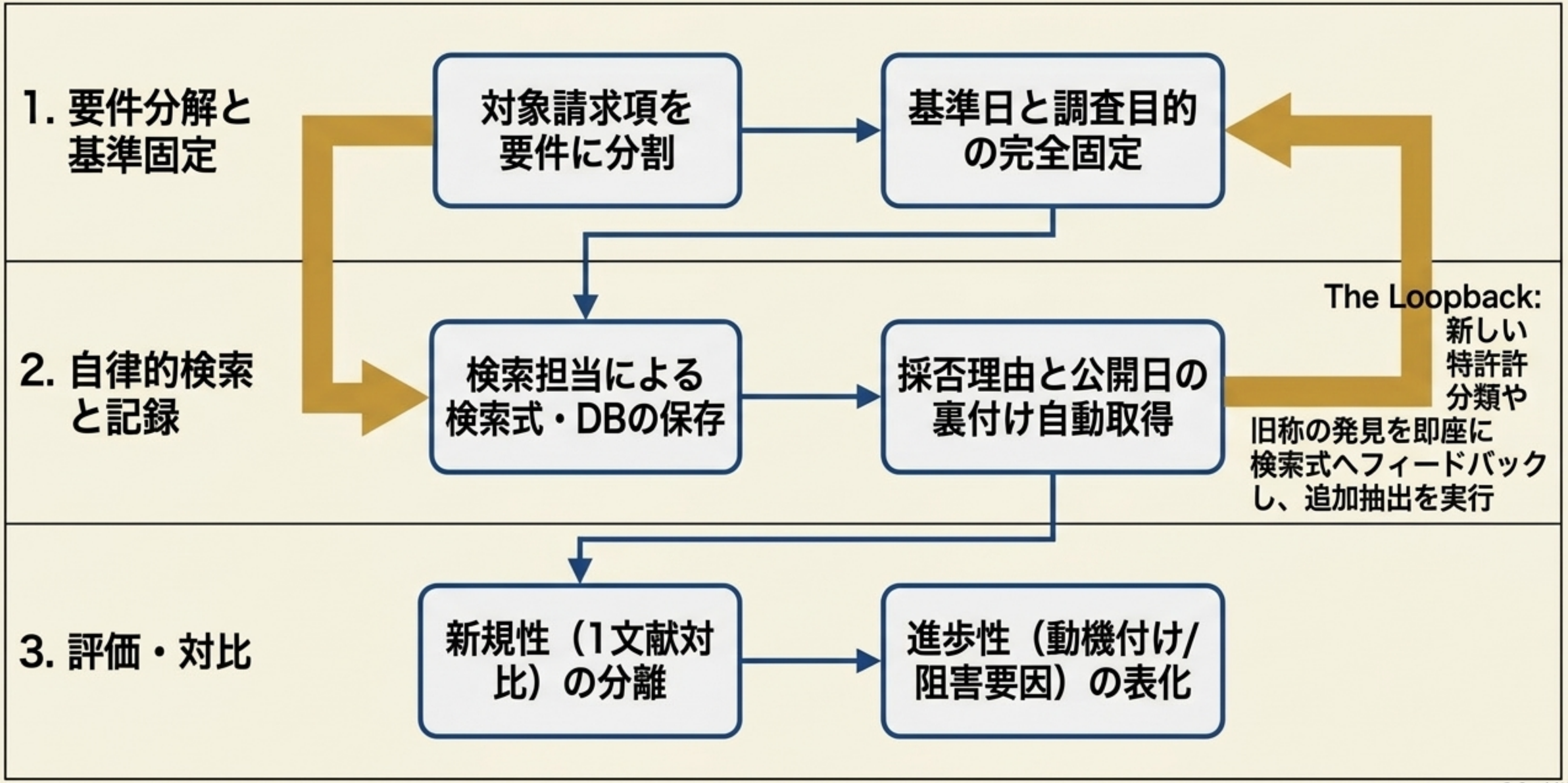
引継ぎ: 独立調査から事業仮説への統合

拒絶理由/引用担当の連携

引継ぎ: 権利一覧とライセンス条項照合

Gemini Notebook

深掘り 1: 新着特許監視と先行技術調査のワークフロー



Gemini Notebook

深掘り 2: 経営に資するIPランドスケープ

特許側アプローチ（技術分類）

抽出要素：半導体装置制御、工場全体の計画などの技術的要素



市場側アプローチ（用途・事業）

抽出要素：デジタルツイン導入事例や
対象工程（プレスリリース等の原資料）

インサイトの統合（The Spark）

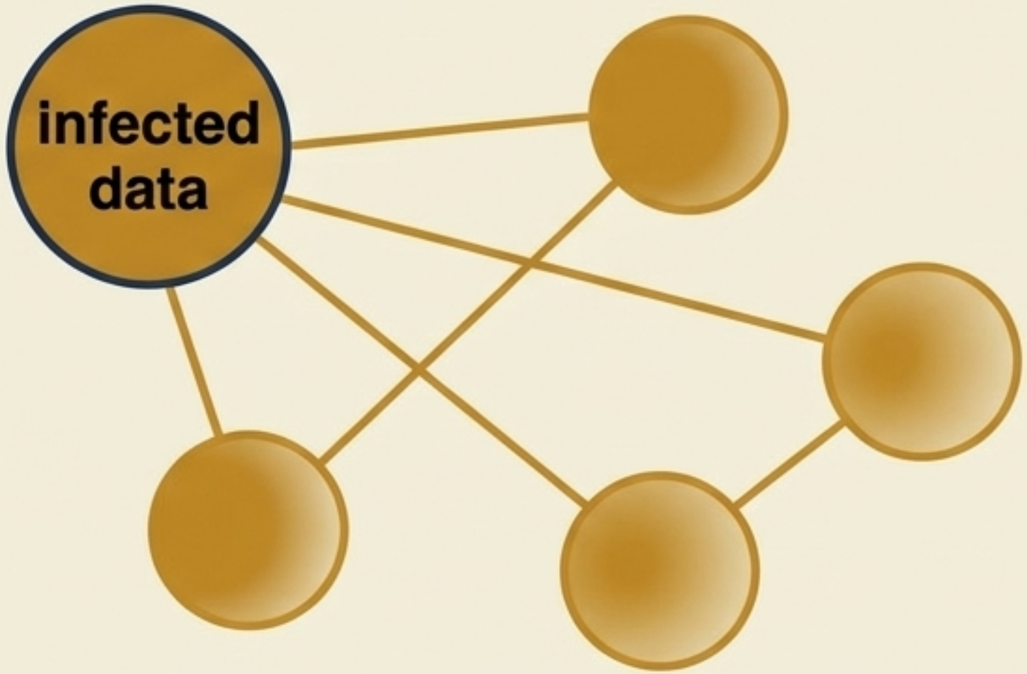
単なる「関連特許の件数」による寄与推定を排除。

同じ企業・工程において技術と市場が結びつく具体的な接点を発見し、「経営に資する事業仮説」として提示する。

Gemini Notebook

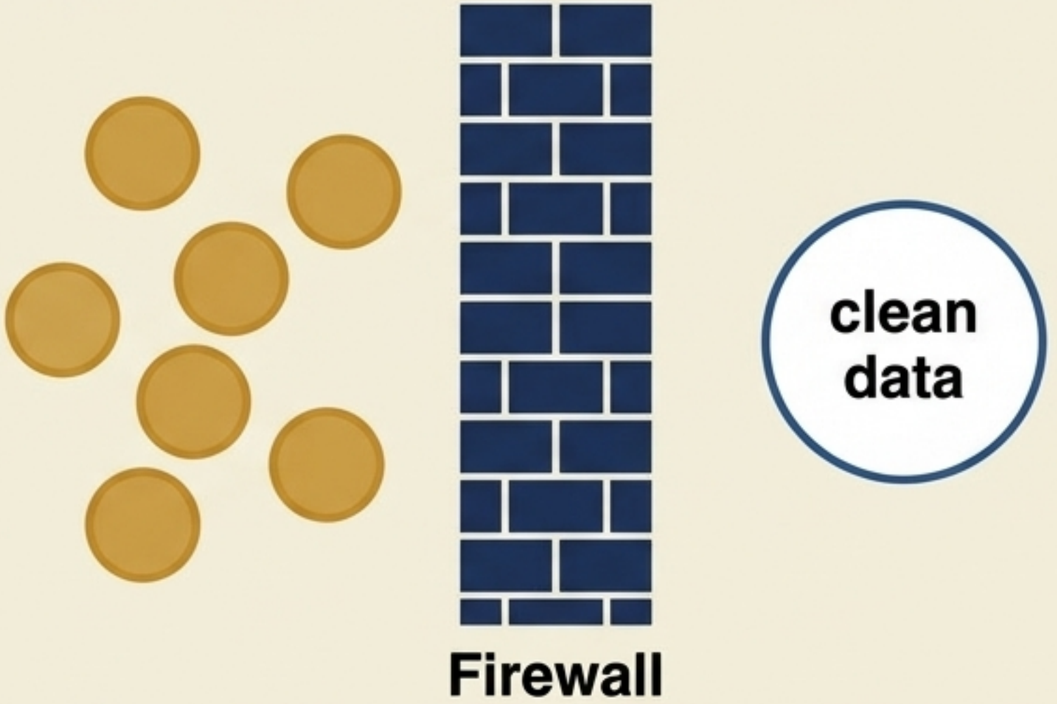
致命的な落とし穴と防御策

リスク：「合意によるハルシネーション」



相互確認の罠。一度共有された「誤訳」や「古い請求項の解釈」を全担当エージェントが無批判に採用し、確信に満ちた誤答がシステム全体に伝播する現象。見解の一致を裏付けとして信用してはならない。

防御策：「ブラインドテスト・アーキテクチャ」

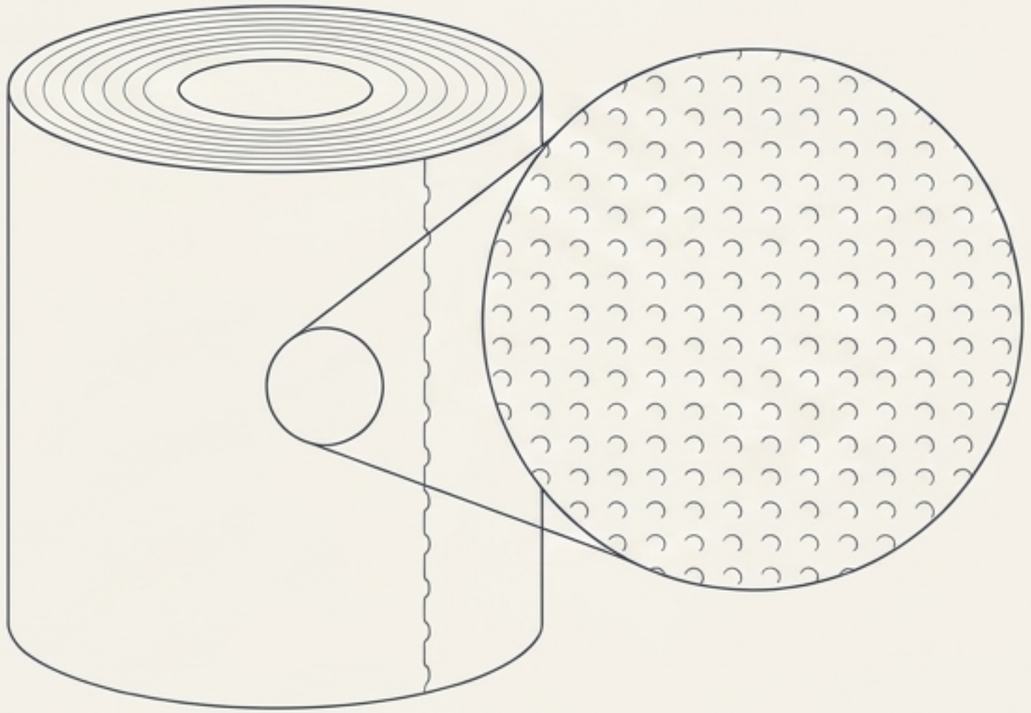


重要案件の照合時、最初の担当が付けた「結論」を意図的に伏せる。照合担当には「原本データ」と「識別番号」のみを渡し、完全にゼロベースで読み直させるプロセスを強制的に組み込む。

Gemini Notebook

実務ケーススタディ：トイレットロール特許の照合

大王製紙（特願2018-232716）の公開時と登録時の比較



対象製品仕様（エンボス加工）

公開時

特開2020-92824
発行: 2020年6月18日
請求項: 2項

登録時

特許第7033529号
発行: 2022年3月10日
請求項: 1項

**実務上の問い: 同じ日本出願において、審査を経て請求項の限定条件はどう進化したか？
製品開発部門に確認すべき仕様はどれか？**

Gemini Notebook

請求項の進化マトリクス（公報対比の可視化）

	公開時 (2020年)	登録時 (2022年) - AIが検知すべき変更点
共通条件	2プライ、巻径 110～115 mm、巻長 36～40 m、紙厚、巻密度等	（維持）
形状・配列	請求項2に分離（底面形状、中心間隔、配列角度）	請求項1に統合。 中心間隔 4.5～5.5 mm 紙幅方向に対して 45°の格子配列
加工方式・寸法	明記なし	シングルエンボスの凹部面積 1.0～2.5 mm^2 深さ 0.5～2.0 mm

FTOにおける重要ギャップ:
この微細な統合と数値範囲の追加を、Multiagentは自律的に追跡・抽出する必要がある。

Gemini Notebook

知財インサイトからR&Dへの「翻訳」プロセス

インプット（製品票の初期情報）

情報: 2プライ、巻長 38 m、巻径 112 mm、エンボス加工

AIの気付き: 巻長・巻径は範囲内だが、加工方式や凹部の面積・深さが不明

↓

翻訳プロセス（知財からR&Dへの変換）

版の照合担当がFTO（侵害予防調査）上のリスクギャップを発見・抽出

↓

アウトプット（開発部門への具体的なアクションリスト）

製品担当へ：「工程票および寸法の測定記録を提出してください」

図面担当へ：「中心間隔(4.5-5.5mm)、角度(45°)、谷線が読み取れる図面を出してください」

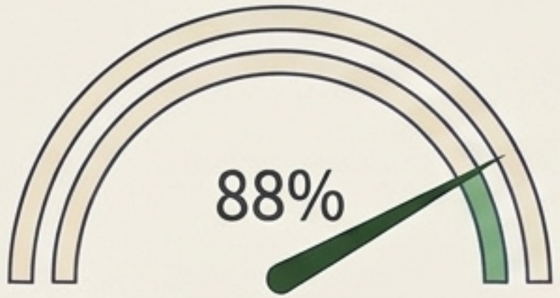
※形状不明な欄は自動的に「未確認」としてフラグ立て。

Gemini Notebook

導入に向けたA/Bテスト・フレームワーク

熟練者が採否判断済みの50件を用いた社内ブラインドテスト設計

Meter 1: 捕捉率 (Capture Rate)



拾えた既知重要案件数 ÷ 全既知重要案件数
（採用候補の適合率も併記）

Meter 2: トレーサビリティ



公報番号・版・請求項番号・根拠位置が「すべて正しい」行の割合

Meter 3: 費用対効果 (ROI)



スレッド消費クレジット、経過時間、人間の修正時間、追加発見案件数のバランス

比較対象: 従来手順 vs. Ultra vs. Multiagent

Gemini Notebook

Multiagentを操るマスタープロンプトの構造

競合特許の二次調査における指示設計

1. 前提条件

- 対象国：日本
- 調査基準日：[年月日]を固定
- 公開時と登録時で請求項が変わった案件を特定せよ

2. 分担と連携ルール

- [公開版と登録版の照合]、[構成要件の抽出]、[別担当による原文照合（ブラインドテスト）]をエージェント間で分担せよ
- 変更を見つけた担当は、対比表担当に公報番号と根拠位置を即座にパスせよ

3. 出力フォーマット

- 結果は一行一要件。出願/公報番号、請求項番号、変更前後の要旨、根拠頁を明記
- 見解が割れた箇所は両方の根拠を併記
- 最終行に、開発部門へ聞くべき仕様を、判断を左右する重要度順に出力せよ

Gemini Notebook

エンタープライズ導入の要件とセキュリティ

エンタープライズ版（Enterprise Max）の基本仕様

- [☑] 顧客データのモデル学習への利用不可（Opt-out標準）
- [☑] セッションの添付ファイルは7日後に完全削除
- [☑] 管理者による利用可能モデルおよび外部コネクタの厳格な制御

未公開発明・機密データを扱う前のディシジョンツリー

入力可否の確認

契約上、対象データをクラウドへ入力可能か?

検索語のサニタイズ

外部検索クエリに含めてよい情報レベルの確定

環境の固定 (運用ルール徹底)

- 案件ごとに利用可能なモデルを制限
- 評価記録と根拠公報は社内指定サーバーのみに保存

Gemini Notebook